


グローバルゼーションの中のフランス文化 『クレヴの奥方』事件を例に

釣 馨

TSURI Kaoru
Université de Kobe
QYI02471 nifty.com

ミシェル・ド・セルトーは『文化の政治学』の中で、1968年後の学生の文化的な状況は「書店を見ればわかる」と言った。「本屋の光景は学術書とポケット版が隣りあうような文化空間に呼応し、序列化ではなく、ひとつの表面をつくりなすマスカルチャーの表現になっている」と。今はインターネットによって68年以降の書店の状況がさらに徹底化され、すべてが情報としてフロー化し、フラット化している。もはや文学や芸術を頂点とするような文化的な階層があり、その体系の中で個々の作品が価値づけられるような形で文化は存在していない。だから私たちは自らの視座によって情報をキュレーションするしかない。これが前号掲載の論考のポイントだった。

同時にフランスと日本を結ぶ回路も多様なものとなっている。以前のように日本が文化先進国のハイカルチャーを押し戴くという一方的なものではなく、日本のサブカルチャーがフランスの若者を魅了し、それが起点となって今や多面的な日本文化の理解につながっている。また貨幣と情報のネットワークが世界を包摂し、ひとつにつなげた結果、フランスと日本は様々な現実や問題を共有することになる。今の若い世代の置かれている状況を目の当たりにするとき、世代間格差、雇用の流動化、高失業率などがキーワードとして挙げられる。それは高度成長を終えた先進国共通の問題である。当然のことながら様々な文化的な事象もそれを反映し、そのような厳しい条件のなかで、どうやって人とつながり、楽しみ、そして学ぶかが問題になっている。フランス文化について考えるときも、それは何らかの形で日本とつながっているし、何らかの形で「自分がどういう時代に生きているのか」を映し出している。これから社会に出る学生たちにとって、多様な回路を通して今の時代の

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

輪郭をなぞることが不可欠になるだろう。フランスはそのための重要なトピックを提供してくれるはずだ。

大学という場もグローバルな新しい教育秩序の中に再編成されようとしている。大学改革は、教育制度のグローバル化のプロセスとしてとらえられ、日本の大学も高等教育の世界市場の中で競争を強いられることになる。大学はもはや行政の管轄ではなく、経営的な手法が持ち込まれ、大学の市場化と企業化が起こっている。そして米国の有名大学の卒業生を筆頭に、エリートのグローバル化も進んでいる。大学は消費者である学生たちに市場価値（大学の就職率）をアピールし、学生たちは企業向けの人的資源として競争力や成果を求められる存在となる。教養や市民教育の砦とされているヨーロッパの大学も功利主義の圧力をじわじわと受けているようだ。しかし、この流れが避けられないものだとすれば、少なからず、CMで流されるような皮相な企業イメージしか持たずに就職活動に突入する学生たちに、グローバル資本主義がどういうものなのか、産業構造全体はどうなっているのか、今の社会がどういう価値によって動いているかを、せめて知らせることが私たちの役割のひとつと言えるかもしれない。

今年のアトリエでは、ひとつの象徴的な事例として『クレヴの奥方』事件を取り上げた。サルコジ前政権は発足とともに「大学の自由と責任法」（通称ペクレス法 *la loi Pécresse*）を成立させたが、これは伝統的な大学の独立と自由を侵害するとして当初から大学関係者や学生の反対が強かった。さらに「教員兼研究者」の地位と労働条件の決定権を学長にゆだねる政令を教育相が発布したことをきっかけに、2009年2月2日、ソルボンヌで全国の大学教員の集会が開かれ、無期限のストライキに入った。大学はその後マヒ状態に陥った。

その過程で新しい抵抗の象徴がかつぎだされた。それは17世紀にラファイエット夫人が書いた『クレヴの奥方』であった。街頭にマイクが立てられ、『クレヴの奥方』の輪読会が行われた。多くの教師、研究者、学生が参加し、街頭の朗読マラソンは6時間続いた。また文化の抑圧をテーマにした寸劇なども行われ、その模様を撮影した多くの動画が動画共有サイトにアップされた。彼らの反発は、サルコジ前大統領の「役所の窓口で『クレヴの奥方』をどう思うかなんて聞くことがあるだろうか。そんなことがあれば、ちょっとした見物だ」という2007年2月の発言にまでさかのぼる。そのときサルコジ氏はまだ大統領ではなかったが、公務員試験に出題された無用な知識の例として『クレヴの奥方』を挙げたのだった。もちろん『クレヴの奥方』が脚光を浴びたのはサルコジ前大統領がケチをつけたからであって、その内容が再評価されたということではない。『クレヴの奥方』は抵抗の象徴とは程遠い、17世紀のセレブな文芸サロンの産物である。しかし、思いがけない宣伝効果で、『クレヴの奥方』の売上は07年から回復の兆しを見せ、08年は06年の3倍の部数が売れたという。

ともあれ、サルコジ前大統領の発言をきっかけとして、研究者や教師たちと学生

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

たちが世代を超えて連帯できたことは驚くべきことだ。2006年のCPE（若者雇用促進策「初期雇用契約」）をめぐるデモでは教師たちは学生のために何もしなかったが、そのとき学生たちは教師たちを助けようと連帯の精神を示した。それは彼らのなりふり構わない姿を見たからなのだろう。ふだん研究室に閉じこもり、取り澄ましている人たちが、いきなり激しい抗議運動を繰り広げ、教え子たちの目の前でラディカルな活動家に変身した。横断幕を持ち、胸にバッジをつけ、道路の掃除夫のような普段縁のない人々と顔を合わせた。そして彼らの研究と文化を伝えることの意味について熱く語ったのである。

パリ第3大学の教授のオリビエ・ブヴレ Olivier Beuvelet 氏が当時ブログで興味深いことを書いていた。それはこの事件が知の転換の局面を示すというものだ。

この事件は確実に記憶にとどめられるだろうし、社会の中での知の位置の修正をもたらすだろう。一方が知を所有し、他方が知を求めるという関係は終わり、知はすべての人々の共有物、重要な楽しみとなるだろう。それまで知が届かないとみなされていた時空で、知が共有され、アクセス可能なものになった。ボルドーでは路面電車の中で翻訳の授業が行われ、公園では公開の輪読会が行われた。パリでは歴史的なデモが行われ、大学とは別の形の講義も行われた。最初それらは抗議行動だったが、個々の中にある知識欲を満たす、喜ばしい知の循環へと向かう文化の変化が、どのような条件のもとで起こり、どんな原理を持っているかを示したのである¹。

教育システムのグローバル化に起因する大学改革の圧力によって、教師や研究者たちが守られた場所から追い立てられ、学生どころか、道路の掃除夫と同じ立場に立たされた。大学は経済の領域からは独立し、むしろそれを軽蔑していたが、常にコストカットやリストラが提案される企業のような場所になってしまった。

『クレヴの奥方』事件においてラファイエット夫人の作品は、その内容が再検討されたのではなく、コミュニケーションの媒介として活用された。これは文学作品を媒介とした関係性の問題であり、文学ではこのような問題は扱えない。むしろ社会学の領域である。デモでは、参加者たちの多くが“Je lis la Princesse de Clève.”と書かれたバッジを身につけていた。それは反サルコジ・キャンペーンのキャッチフレーズになった。またその年のSalon du livre（毎年春に porte de Versailles で催される本の見本市）で、同じバッジをつけた人々がカメラに向かってメッセージを発している動画がある²。それぞれ« J'ai lu la Princesse de Clève. »とか« Il faut le lire tout le temps. »と言っている。「Je lis la Princesse de Clève.」— この言表において「読む

¹ Sarkozy, l'homme qui sauva la princesse de Clèves... (20 avril 2009)
<http://www.profencampagne.com/article-30451993.html>

² Lisez la Princesse de Clèves... et surtout Lisez !!! (Le Motif)
http://www.dailymotion.com/video/x8p020_lisez-la-princesse-de-cleves-et-sur_news

という行為」に重点が置かれていることに注意しよう。普段、私たちは文学作品を前にするとき、当然のようにテキストの意味内容に関心が向く。その場合、私たちはそれを誰にも邪魔されない場所で読む。孤独な読書はテキストの意味内容に従属する行為だ。しかし、『クレーヴの奥方』事件では、小説の中身についてほとんど言及されることはなかった。テキストはあくまで口実にすぎず、それを読んだと宣言することや、人前で声を出して読むというパフォーマンスが前面に出ている。つまり、テキストの内容を後ろに押しやって、読むという行為に特権を与えているわけだ。それは儀式的な行為である。儀式の本質とは何か。それは沈黙を破って、声を発することである。同時に他者の視線の中に立ちただかることでもある。話すこと、声に出すこと、メッセージを発すること。その行為が表面化するのには、私たちが何らかの困難や危機的な状況にあつて、目の前が不透明で、不確かなときであり、それを乗り越えようとするときだ。それは必然的に、あるコンテクストに介入し、それを変えようとする政治的な行為につながる。

私たちがグローバルな貨幣と情報のネットワークに抵抗して生きるとすれば、そのネットワークの姿を正確にとらえ、他者とつながりながら状況に介入していくしかないからだ。宇野常寛が村上春樹の「エルサレムスピーチ」を引き合いに出して、「壁(=グローバルな貨幣と情報のシステム)との関係を考えない卵の思考はほんとうの意味で自己に向かうことを意味しない」³と述べている。教師や研究者は街頭に出て初めて学生や道路の掃除夫と出会い、同じシステムの中にかめとられていることを理解した。何もせずに自分の立場に固執したとすれば、鏡の前でポーズをとるような滑稽なことではなかっただろう。

グローバリゼーションによってひとつの盤上に全く異なる価値観を持つ人々がひしめき、これまでつながらなかった部分がつながる世界では、文学や思想の言葉が影響力を持たなくなる。それは21世紀に入って決定的になった感がある。孤独な読書や研究によって個人の自意識の問題を突き詰めてみても、異なる価値観のあいだを調停できないし、他者との連帯を模索することはできないからだ。それと入れ替わりに社会学や心理学のレトリックが活用されるようになり、インタビューやフィールドワーク、カウンセリングといった実地的かつ対面的な手法が優位になっていく。これまでの教養について考えてみても、それは「読書による人格形成」、つまり書齋で孤独に書物を紐解く文学者がモデルになっている。しばしば批判されるように、それはもっぱら無秩序な読書や高踏的な趣味の鑑賞に埋没する一方で、現実の問題に全く目を向けず、それどころかそれらを黙殺するような文化主義に陥っている。社会学者の竹内洋が「教養が培われる場としての対面的な人格関係」⁴の重要性を指摘するように、教養が生き延びていくとすれば、それを他者との差異化に用いるのではなく、他者とのコミュニケーションのために共有するものだ。

³ 宇野常寛『リトル・ピープルの時代』、幻冬舎、2011年、pp. 146-147.

⁴ 竹内洋『教養主義の没落』、中公新書、2003年、p.246.